

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3270500329		
法人名	有限会社 幸久の家	6280002007976	
事業所名	グループホーム 陽だまりの森 野ん美里館		
所在地	島根県大田市久利町久利691番地		
自己評価作成日	令和8年2月10日	評価結果市町村受理日	令和8年5月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 コスモブレイン
所在地	島根県松江市上乃木7丁目9番16号
訪問調査日	令和8年3月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域周辺には小学校や保育園、老人会もあり、以前は地域交流を行っていたがここ数年コロナウイルスの関係でほとんど交流はできていない。施設内では毎月、行事(誕生日会や節分など)の計画を立てて実施している。研修については外部研修、内部研修を実施し、質の向上を図っている。ご家族とは、来所時や電話時に利用者様の状況を報告している。毎日昼食前の口腔体操や、夕方体操の実施など、皆で参加をしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者が変わって丸2年が経過した。作年秋に1つのユニットでコロナの感染者が発生し、無症状の方や軽度の方も多かったが行動制限が必要となり、一部では機能低下に繋がったケースもみられる。その後、介護度3になり特養へ移行した方もあり、利用者の入れ替わりが進んだことで、現在の平均介護度は以前より軽くなっている。利用者は全員が女性で穏やかな雰囲気の中、デイルームで過ごす方が多い。ペットボトルのキャップを利用した手作りのゲームや手作業、数字合わせなどの脳トレに取り組んでいる。往診結果を含め日頃から家族への連絡が密に行われており、家族アンケートからも安心感に繋がっている様子が伺える。コロナに加え市内でノロウイルスが蔓延するなど感染症への警戒が今も続いており、面会等の緩和について慎重に検討を重ねている。昨年秋デイサービスを休止したことで職員体制は整ってきているので、今後は外出などの活動を徐々に増やし、精神面の刺激になる取り組みが進むことを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果		項目		取り組みの成果	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらい				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらい				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「あなたらしく、自分らしく」という法人理念をもとに実践努力はしているが、話し合う時間も少ししか作れず、十分でないことも感じている。	法人の理念のもと、ユニットごとに年間目標を作成しており、毎月のミーティングの時に評価している。新規採用職員には管理者が理念の話をしており、その他の職員にも業務の中で理念に立ち返るよう話し共有に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会には加入し、草刈りやごみ当番には参加している。町内の市議員の方には運営推進委員になっていただいている。通常、地域の老人会、小学校、保育園との交流もあるが、ここ数年コロナウイルスの関係で交流はほとんどできなかった。	コロナ禍から地域との関りはなかなか戻っていない。小学校の卒業生に記念品を渡すことが今年やっとできています。自治会の総会や奉仕作業に参加はしているが、ボランティア交流は中止の状態が続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	具体的なことは実施できていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 株式会社 コスモブレイン	二か月分に一度運営推進会議を実施しており、活動状況の報告をしている。そこでいただいた意見はユニットの会議で検討し、結果を報告している。	家族代表の参加はコロナ以後、途切れている。市の職員に前介護相談員、他の小規模の管理者の参加で定期に開催。利用者状況に行事等の活動状況、訓練、研修等の報告を行い意見交換に繋げている。	複数の家族や地域代表等、できるだけ参加者を増やし関りを深め、サービス向上に繋げていただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 令和8年3月31日	現状としては、運営推進会議での意見交換にとどまっている。また、月に一度介護相談員が来所し、情報交換、利用者からの意見を聞き出してもらっている。相談員は運営推進委員でもある。	運営推進会議には毎回、市から参加があり、専門的立場から助言を得ている。生活保護担当課からは来所して面談があり情報共有している。管理者は状況報告を持って市に出向く際には、包括と話をしたり関係性の維持に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会を定期的に開催し、その内容を周知し、各ユニットで勉強会も開催している。現状、施錠しているが、あくまで防犯目的であり、利用者が出たい時には開錠している。	定期の委員会ではセンサーマット使用の必要性を含め検討を重ねている。場所の認識ができない方は外に出て一緒に歩くようにして気持ちを落ち着けている。年3回虐待を含めたチェックリストを職員個々に記入したり、研修を重ねて意識を高めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修に参加したり、リモート研修に参加して虐待に関する知識を学んでいる。また虐待に関する事は、基本的にユニットミーティングで検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	具体的な成年後見制度等の学ぶ機会や関係者と話す機会などはほとんどない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	出来る限りの説明は行っている。不安、疑問点に回答をし納得されたうえで締結を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置しており、家族からの要望について上部、管理者、職員と検討、改善を行った。	意見箱に寄せられた「外泊を希望する」との家族の意見を受け、調整して外泊に繋げている。毎月、行事や活動状況を載せた便りを家族に送付すると共に、フェイスブックにも行事の様子を載せている。往診結果はその都度電話で伝え、その際にも意見を聞くようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個人面談や会議で意見が挙がることもあり、内容に応じて上部で検討している。	年2回自己評価をして振り返りの機会としている。定期的な個人面談はしていないが、極端に評価が低い職員や管理者が必要と感じた場合は話をする機会を持つようにしている。ユニットの会議でも意見を聞いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	週に1回は状況把握をしてもらっている。職員の勤務状況等は都度報告し、契約更新時などの状況に合わせて検討している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実態と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	主任やリーダー、本人から状況を聞き取り、把握に努めている。それに伴い本人に必要な研修などの参加を勧めているが、今年度はリモート研修、外部研修に参加した。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市のGH部会に加入している。その部会の研修に参加し、交流する機会を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前には事前に見学を勧めており、可能な限りの情報を聞き取っており、また、ご家族や施設職員からも状況を聞き、本人の思い等の把握に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用開始時にはご家族の意見、要望を確認している。誕生日の行事の際には、家族の意向を確認したりしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所決定の前に、可能な方には見学をしていただいたうえで入居の判断をしてもらっている。入居の意向であればご家族、本人の意向を確認し、入居されてからのケアの検討を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事等できることはできる限り一緒に行ったり、困ったことなどあれば傾聴したりと、共生の意識付けを目指している。制限は変わらずあるが、少しずつ食事づくり等一緒に行っている。暮らしを共にする関係性が少しずつ以前のように戻りつつある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナウイルスの関係でパーテーション使用や短時間での面会しかできていないが、以前に比べると面会者は増えている。職員も電話等で家族と話しをする機会を作っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族と受診以外の外出や外泊をする機会を作り、馴染みの人や場所との関係が途切れないようにしている。	昨年秋に片方のユニットでコロナ感染者が多数出たため、面会は予約で玄関で行っている。週1回パンの販売者が来るので選んで購入する方がいる。毎日化粧する方があり、女性ばかりで訪問美容を楽しみにしておられる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	必要時には介入し、利用者同士の会話がスムーズにいくようにしたり、一緒に作業できるようにしているが、関わりがほとんどできない方もおられるのが実際である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後、具体的に相談、支援は特にはない。何か相談などあれば対応していきたい。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意志の疎通が図れる方には聞き取りをしたり、日々の生活の中での発言や行動、生活歴から、意向をくみ取り、プランに反映させている。	畑仕事や草抜きなどの外仕事をしていた方が多く、塗り絵などの手作業が苦手な方、数字合わせなどに熱中する方もある。洗濯物たたみや調理の下準備など家事関連の作業を好む方もあり、できることを計画に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人、ご家族から聞き取りをして把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人記録を利用している。一人一人にゆっくり関わる時間がなかなか取れていないため、本来の有する能力や心身状態がわかりにくい現状もある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	出来る限り、ご家族、本人を交えての話し合いを目指しているが、難しい現状があった。主治医には電話、受診、往診時に意見を頂いている。	モニタリングは6か月に1回、計画の見直しも合わせて実施している。担当者会議には家族参加はないが、利用者本人の参加で日頃の話をしながら思いを聞き繋げるようにしている。家族には電話等で要望を聞き計画に反映するようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子は個別に記録に残している。記録が十分でなかったり、周知できてない状況もある。基本的に半年に1回は計画の見直しを行っている。状態に変化があった時には都度実施している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに対して、出来る限りの検討、対応を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年度、地域交流は実施できなかった。地域に対し利用者が活躍できるような取り組みも出来なかった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医については、ホーム側からは指定はせず、本人、ご家族の意向で決定している。医療機関によっては往診もあり、特変時には往診対応もしてもらっている。特変時にはご家族とも相談をして主治医に報告している。	今までのかかりつけ医を続けており定期の往診を受け、緊急時等指示も得ている。往診が難しい場合や内科以外の受診についても家族対応で続けている。週2回の訪問看護の利用もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ホームと契約している訪問看護の看護師が定期的に訪問し健康管理をしてもらっている。特変時には24時間相談、訪問も可能である。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	関係づくりとして何かを行っているということはない。利用者が入院されれば、情報提供を行い、入院中も状態確認、相談等を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	早期での本人、ご家族の意向確認はできている。可能性が出た時点で再度確認し、ホームの意向なども伝えている。主治医、ご家族、訪問看護の協力を得て、看取った経験もある。	入所時にも介護度3になった時にも家族と本人の意向を確認し、希望があれば特養への申し込みをしている。3年前には重度化した利用者について主治医、訪看、家族で話し合い、ここでの看取りを希望されるも、その後安定している方もある。今後に於いても話し合いの機会を持ちながら進めることとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急法の訓練、研修を実施し、実践力を身に付けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	5月に避難訓練を実施している。また、災害時の対応等について、内部研修や勉強会を実施している。	平坦な場所で自然災害の危険性は少ない。大きい地震の経験もあり、山間だが積雪量も少ない。地域の方や消防団の参加で夜間想定で避難訓練をしており、職員の避難誘導の様子を見てもらい、助言を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	適切でない声掛け、言葉遣いがあるのは否定できない。その際はミーティングで議題として挙げ、検討するようにしている。	虐待、身体拘束のチェックリストには接遇面の項目も含まれており、年3回、個々の職員について確認をしている。チェックを通じて具体的な不適切行動の理解が進んだこともあり、その場で声掛けすることで、以前より不適切な場面は減少している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員の都合に合わそうとしている現状も見られる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の都合に合わそうとしている現状も見られる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧水をつける方はおられる。整容などできない方は介助で行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理は感染症予防の観点から手洗い、消毒、手袋、マスク着用して頂いている。食器を洗ったりされる方はおられる。職員が利用者と一緒に食事をするのは感染症の関係で控えている。	ご飯と汁物は作るが副食3品については湯銭の食材を利用している。同市内でノロウィルスの集団感染が出たこともあり、消毒の強化を続けており利用者が調理に関わる場面は持っていない。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事形態などは個別に必要に応じて対応している。また、本人の嗜好品などを取り入れ水分など確保に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の気持ちにも配慮しながらではあり、毎食後行えてない方もおられるが、夕食後には必ず実施している。自身でできる方もおられるれば、介助を要する方もおられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	基本的にはトイレでの排泄と考えているが、個々の状態に合わせて、ポータブルトイレやパット類の使用をしている。	介護度の軽い方が多く、介助の必要な方が少ない。パット交換が可能な方も多いが、できない方もあり、個々の状況に応じた介助をしている。介護度5の方は夜間のみおむつを使用し、日中は出来る限り自立を促している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝、乳製品を提供したり、水分摂取も心掛けているが、下剤等の使用もしている状況である。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	その方にかかる介護量などで入浴時間を決めていたり、可動域制限により湯船につかっただけで済むことができない現状もあるが、できる限り、本人の希望に沿うようにしている。	やや大きめで深さのある家庭浴槽を使用しており、またぐことが難しく浴槽に入れない方にはシャワー浴で対応している。週2回入浴できるように調整している。入浴を拒む方もあるが、時間帯を変更したり、声掛けの工夫を行うことで、安心して入浴できるように促している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	習慣として寝間着への更衣もしているが、具体的な支援としてはあまりできていないように感じている。睡眠導入剤を服用されている方もおられる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	どんな薬を服用されているのかわかるようにファイリングはしているが、全職員が把握をしているかと言われれば、そうではないと思われる。ただ、重要と思われる薬についてはある程度副作用などの症状については注意出来ていると思われる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	充実した生活を利用者がおこなっているかと問われると、できていないのではと思われる。毎日単調で楽しいと思える場面は少ないと思われる。ただ、その中でも洗濯物を畳んだり、軽作業はしていただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルスの関係で外出支援はほとんど実施できていないが、ドライブに出掛けたり全員ではないが、彼岸市に出掛けるなど外出支援に努めている。	自然豊かな場所で施設前に出ると桜を楽しむことができる。普段は周辺を散歩したり、少人数でドライブに出かけるようにしている。今年度はコロナの発生や職員体制が整わない時期もあり、外出の機会はまだ多く持てていないが、家族と泊りで温泉にでかけた方もあった。	外出の機会が増やせるよう検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状、自身で金銭管理をされている方はほとんどおられない。紛失や行動障害に発展することを恐れ、自己管理に対して抵抗がある職員も少なくない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族から電話がある方もおられるが、ほんの一部である。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感をとり入れる採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各所には表示はしている。また、季節感が出るように季節ごとに飾りは変更している。都度換気、エアコンで空調管理はしている。	2つのユニットのダイルームから中庭を見ることができ、施設周辺は自然豊かな場所で周囲の木々からも四季の変化が感じられる。道路から少し入っており車の騒音もなく静か。感染症が地域で発生していることもあり、消毒の徹底やパーティションの使用などの感染症対策を継続実施している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各所には表示はしている。また、季節感が出るように季節ごとに飾りは変更している。都度換気、エアコンで空調管理はしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	基本的には席を決めており、自分の席だと認識されている方もおられ、自然と集まり会話が生まれる。	居室には収納場所や戸棚が備え付けられており、布団や衣類は季節に合わせて家族に入れ替えてもらっている。テレビ台にテレビ、テーブル、引き出し式のケースなど家庭から持ち込まれている。家族写真を飾る方が多い。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各所、危険な物には表示をしていたり、またリスクとなりうるものは除いたり、事故のないように注意はしている。		